

「イスラム国」

2014年09月18日

「イスラム国」の存在と残虐な処刑が世界の関心事になっている。アブー・バクル・アル＝バクダーディを指導者とする「ジハード集団」から出発し、過激なテロを繰り返し、紆余曲折しながら、2014年6月29日、イラクやシリア領土内の制圧した地域でイスラム国家として「イスラム国」を樹立すると宣言した。世界は国家として認めている訳ではない。イスラム教スンニ派の過激派組織などと言っていたが、最近は「イスラム国」と言わざるを得ない状況にある。軍事、経済、行政など、国家の体裁をなしてきている。イラクで勢力圏を確保し、シリアでもアサド政権と反アサド政権組織の間に割り込み、勢力を強めている。エジプトやサウジアラビアの宗教指導者たちは「イスラム教を悪用し、イスラム教のイメージが損なわれる」と批判しているが、イスラム教を基盤とした国家樹立を謳っている。そこでは、イスラム教しか認めない宗教弾圧があり、凄まじい粛清が行われているという。恐怖の集団であることは確かであろう。

「イスラム国」は、拘束していたアメリカ人とイギリス人に自国の政策の過ちを言わせ、斬首した。その映像が流され、アメリカは本物であると認めた。日本人男性が一人拘束されている。処刑の「残虐」さが問題にされている。身の毛がよだつ、赦されない犯罪である。しかし私はあえて、誰が「残虐」と言うのかを問いたい。アメリカを中心とした多国籍軍は、アフガニスタン、イラクに激しい空爆を加え、地上軍を投入し、凄まじい殺害をしてきた。桁の違う「残虐」行為を続けてきた。9・11の「同時多発テロ」の首謀者とされたウサーマ・ビン・ラーディンを殺害したテレビ映像を見た。アフガニスタンの主権を犯し、軍隊を送り込み、素手の彼を射殺し、運びだし、海に投棄した。勝利と言って喜ぶアメリカ高官たちには法の下で正義を守る姿勢はみじんもない。「残虐」そのものである。イスラエルのガザへの侵攻はメディアが報道したので「残虐」の実態を知ることができた。無残に破壊された町々、傷つけられ、殺された人々の状況は正視に耐えない。

「イスラム国」の斬首を「残虐」と言う前に、自分たちが犯した「残虐」を認めるべきではないか。それを認めず、いきり立つアメリカ大統領やイギリス首相の態度と言葉には納得できない。9・11後、テロ撲滅と言って、アフガニスタン、イラク攻撃をしたが、実態は、癌細胞をいじって拡散させるように、撲滅どころか、広がり続けている。「イスラム国」の建国宣言は、その流れの中にあるのではないか。

アメリカはイラク国内の「イスラム国」の空爆を始めた。斬首を「残虐」とする国々を集め、シリア国内の「イスラム国」も空爆すると報道されている。

「イスラム国」は一日に何億円という収入があり、仲間に対する保護、支援は行き渡っている。そして、軍隊も3万人を超え、しかも、欧米や先進諸国から若者が集まっている。このことが問題であろう。覇権主義、経済格差の中で「居場所」を失い、怒れる若者が新しい地平を求めている。それは、極めて虚無的な行動ではあるが、軍隊に守られた横暴な資本主義が行き詰っていることを表したいのではないか。彼らの言い分を聞いて、新しい世界観を立てなければ、テロは収まることはなく、更に、拡散するだろう。

日本は平和憲法9条を堅持する立場から、「イスラム国」の処刑、粛清は認められない、そして、攻撃する国々に更なる「残虐」を重ねることになると発信すべきである。